

五、國語朝鮮語の語彙比較研究資料

近來單語の方面から、又語法の方面から、國語と朝鮮語との比較を試みる者が

可なり多くなつて來た。併し其の比較論たる、何等一定せる語學上の規則あるにあらず。單に外形の類似せるものを漫然捕捉し來つて彼是理窟を附するに過ぎぬ。昔時の學者は見聞が廣くなかつたから隨分突飛な説を吐いたものだが、今日の學界は何時までもさういふ呑氣な研究法を許さぬ。忠實なる研究法によつてどこまでも學術的の歸結を求めること、に力を竭さねばならぬ。

今本篇で紹介しようとするのは、明治以前に於ける國學者の、日鮮兩語の語彙比較論の一端である。語法上の事は一切省略する。中には今日の學者の説に大なるヒントを與へたものもあるし、又今日の學者のいふ所と偶然一致したものもある。それは何れにしても、余は唯世人が徳川時代に於ても斯の如き語源説があつたといふ事を知り、それによつて自ら其の可否を判じ、更に一步を進めて確實なる議論を立てられる資料たらしめん事を希望するのである。明治時代に至つてからも諸學者によつて盛んに比較論が試みられたけれども、直接必要と認めるものの外は悉く省略することとし、又余の此等に對する批評も一切遠慮することにした。それは世人が却つて近頃の學説に迷はされ、公正な判斷を誤ることが

いと思つたからである。

本篇は日鮮兩語の間に存する共同語源説を紹介するのを以て主眼とするのであるが、固より我が國には明かに朝鮮語と認むべきものが古くから傳つて居る。日本書紀等にある人名地名其の他事物の名稱等は即ちそれである。此等は實は本問題に直接の關係の無いものであるが、序に之をも併記することにした。但しそれには語頭に●を附し普通の語源説○符號を附すと區別することにした。又本篇は固より我が國に於ける明治以前のあらゆる語源説を網羅したものでない。今日まで余の管見に入つた少數の記載に過ぎぬことを前以ておこさわりして置く。

重なる引用書名及び著者

傍廂	(寶藤彦磨)	甲子夜話	(松浦冠山)	嬉遊笑覽	(喜多村信節)
古事記傳	(本居宣長)	骨董集	(山東京傳)	摺尻	(天野信景)
善庵隨筆	(朝川鼎)	玉かつま	(本居宣長)	中外經緯傳	(伴信友)
東雅	(新井白石)	南留別志	(荻生徂徠)	日本書紀通證	(谷川士清)

日本釋名 (貝原益軒)

比古婆衣 (仲信友)

北邊隨筆

(富士谷御杖)

松屋筆記 (高田與清)

柳菴隨筆 (源信充)

俚言集覽

(村田了阿)

倭訓栞 (各川士清)

圓珠庵雜記 (僧契沖)

○

あさき(島) 日本紀に島の字よむでアサキといふは、韓國の方言と見わたり。(東雅)

○子を朝鮮語にあどりといふ。跡取とよぶに近し(倭訓栞)

○あはび(鰻) 倭名鈔に鰻をよめり。上總にかひつけと云。貝つきなるべし。わざにあひといふ。其肉あはくしくして、乾ての用多ければ名くるなるべし。本草を

引て鰻とも見われど、鰻は漬魚なればいぶかし。本草もいづれを指るにや。訓蒙字彙に殻を石決明といひ、實を鮑魚といふによれば、朝鮮の方言成べし。(和訓栞)

○あや(漢) 漢よむでアヤといふは、當時三韓の方言也。(東雅)

○ありかも(駝駝) 百濟の方言と見わたり。(東雅)

●ありなれがは(阿利那禮河) 朝鮮の鴨綠江をいふ。ありは鴨綠の音、なれは江の義、川

の韓語也。かはは重て川の和語を加へたるなりといへり。和泉式部あかざりし君を忘れんものなれやありなれ川の石はつくとも、神功皇后紀の誓約をおもひよせたる歌也。(和訓栞)

松下氏曰、鴨綠江在三韓、天下三大河之其一也、阿利那禮河是耶、阿鴨也、利綠也、二字略音、那禮三韓河之俗語即江也、再謂江者、猶佛書梵漢並舉例、今按唐志、鴨綠江其水如鴨頭也。(日本書紀通證)

(阿利那禮河に就いては、古來、多くの異説がある。谷川士清、松下見林、河村秀根、太田方、數田年治等は之を以て鴨綠江となし、飯田武郷は新羅の東江即ち洛東江を以て之に擬して居る。然るに宮崎法學博士は慶尙北道慶州の闊川(北川又東川ともいふ)を以て阿利那禮なりとし、精細なる論證を試みられた。今日に於ては最も有力な説となつて居る。)

○うさん(胡盞) 因に云、俗にウサ、ンナ事又はウサンクサイなどといふは、胡盞こさんに起れる詞にや、胡盞もど高麗とはいへど、たしかならねば、さいへるにても有べし。(松屋筆記)

○うし(牛) 牛をウといふ事は韓地の方言とこそ見えたれ。即今も朝鮮の方言牛

を呼ぶ事はウといふ也。(東雅)

○^に(往) 荏をエといふ義不詳韓地の方言の轉せしに似てけり。(東雅)

○^に(江) 天智紀に高麗國寒極り、凍冰れりといふ事を記され、凍の字讀てエといふなり。即ち溟江也。溟讀てエといふは、彼方言によれる所なり。さらば此にして江をエといふ事も、彼方言に出しも知るべからず。(東雅)

○^わばしと。雄略紀に女郎をよめり。韓語成べし。(倭訓栞)

○^おこし。日本紀に下をよめり。韓語なり。(倭訓栞)

○^おも(母) 舊事紀日本紀等に、母の字讀てオモといひけり。百濟の方言にも母をオモと云へり。今も朝鮮の俗母をオモといふは古の遺言也。彼國に傳へしか、又彼國の語の我國に傳りしか、凡て詳ならず。(東雅)

東雅に百濟の方言に母をおもと云へり。今も朝鮮の俗母をおもと云ふ。……と云へり。我より彼に傳はりしならん。(古事記傳)

今按神武紀母樹萬葉集母山皆訓於毛兒思之也。今朝鮮語亦云於母、又與阿母通。阿母見史倉公傳註乳母也。(日本書紀通證)

日本紀に母をよめり。古事記に御母とも見ゆ。乳母ちちう、湯母ゆうなども見わたり。今朝鮮語にもしかいへり。一説には梵語の阿摩なりといへり。萬葉集に阿母と書けり。史記の註に阿母は乳母なりと見わたり。よて萬葉集に乳母をもよめり。(倭訓栞)

(宮崎、金澤、白鳥諸博士も朝鮮語「어미」と同語であるといはれて居る。)

おりこけ 欽明紀に王を訓す。韓語也。(倭訓栞)

○かささぎ(鵲) カササギとは新羅の方言と此國の方言とを併せ呼びしと見わたり。即今も朝鮮の方言に鵲を呼びてカシといふなり。カサといひ、カシといふは轉語なり。サギは即噪さわぎなり。鵲噪さわぎぬれば喜あるなど、漢人の説に見わたり。

(東雅) (但し、「東雅」卷一には又「サは喧しく騒しき」義也。……鵲は噪きものなり。とある。)

蓋鳥驚之訓義、新井氏謂今朝鮮語云加之、與加佐通。(日本書紀通證)

かささぎと云ふ鳥に二種あり。まづ其一種はもと韓國の産にて、漢國にて鵲といへるものにて、その皇華わくにに渡り來し始は、日本書紀に推古天皇の御世六年夏四月、難波吉師磐金至自新羅而獻鵲二隻、乃俾養於難波杜、因巢枝而産之と見え、

(中略)其が名は本草和名抄等に、鵲は和名加佐々木と訓るものこれなり。さて其はもと皇華言もて負せたる名に、はあらで、新羅の國言もて呼びならへるものになんありける。其はもろこし宋世に孫穆と云へるが、朝鮮の事を記せる鷄林類事と云書に、その國語どもを載たる中に、鵲曰喝則寄がつせと註せり。しかるに朝鮮の崔世珍が著せる訓蒙字會と云書に此書明の嘉靖六年に著せる由漢字の鵲をおのが朝鮮にて呼名に當諺文字もて加佐とよむべく注せり。字會鵲字の下に諺文に下なる字は志也久なり。鵲の音を注せるなり。然るに新井君美主の書されたるものに、今の朝鮮語に鵲を加之と云へり。云はれたる説なるは、かの加いはゆる喝則寄の略言なり。左とやうに云へるだみ言を然きいなしたる説なるべし。しかれば鵲を加佐々木といふは、もと韓言の名なるを、そのかみ磐金が新羅より持歸りて、その國言に加佐々木と呼ぶ由、奏して獻りけるが、今に其名の傳はれるものなりけり。かくて此鳥の事のふるき書に見わたるは、蓋囊抄に(中略)播摩風土記に引佐郡船引山と云ふ此山有鵲鳥、世俗三韓國鳥、栖枯木穴、春見之、夏不見といへり。此國にもあるものにこそと記せり。件の風土記の外にまさしく鵲のありし趣を記せるものいまだ見あたらず。世の希ものなりけらし。(中

略。此鵲の形狀なるもの近世西國の方所々にいできて、なべては朝鮮鳥と呼び、また所によりて高麗鳥、唐鳥とも呼びといへるに名播磨風土記に韓國鳥或は褐鳥など呼べり(中略)もとから國より渡り來れるが、漸々蕃息たるなりと語り傳ふとぞ。これいはゆる漢國の鵲にて、こなたには古より韓言に呼び傳へたる加佐々木なるべし。云々 (比古婆衣)

(宮崎法學博士「かささぎ」は朝鮮語の「가사」即ち鵲の訓「가사」其の「音」を重用して一語をなせるものに出て居るといはれて居る)

○かはら(瓦) さらばカハラといふは百濟の方言にて、瓦の字の音を轉じ訛れるも知るべからず。(東雅)

○かぶ(甲) 又甲の字をカブといふは韓地の方言なり。即今も朝鮮の方言かくの如し。是等またく彼此の語音の相合へるなり (東雅)

○かぶと(兜) カブトといふが如きは、もとこれ韓地の方言に出し也。○古の時韓地の語にカブトといひしが如きは、もとこれ甲冑の二字を其方音をもて呼びしなるべし。即今も朝鮮の音には甲を呼びてカブトといふ也。(東雅)

(松村任三博士は朝鮮語では甲鎧、兩字さし之を言ふといふ我が國に於ても古くはカブトなる語を被るもののみならず鎧の意味にも使用したやうである。朝鮮語言ふの

皆は「甲」の字音、又は「衣服」の意であるといはれて居る。

○かへで(楓) 朝鮮の人に逢ひ、たま／＼此事をば忘れて問ふ事もなかりしに、正徳の聘使來れる時、若水稻子其學士李重淑といふものに問ひし所に、其答へし所を見るに彼國の楓樹と相同じと見ゆ。若し然らば楓の字讀でカヘデとなす事の始は、韓地の方言にや因りぬらん。此物の漢名さだかならざりしかば、漢語抄辨色立成等の如きは、鷄冠鷄頭等の字を用ゆ。これは其形色の似たるに取しなり。此俗カヘデカヘルテなど名づけ云ひしも、又其類の似たるに依れりと見たり。(東雅)

○かま(釜) 釜をカマといふが如きは、韓地の方言にや出でぬらん。即今も朝鮮の俗釜を呼びてカマといふなり。(東雅)

釜をいふは今の朝鮮語も同じ。倭名抄にはかなへと訓せり。(倭訓栞)
○かみ(紙) 義不詳。我國の紙墨等造る法は高麗より傳へしなり。推古天皇十八年の記に彼國貢上僧曇徵能作紙墨と見ゆ。是也。紙を名づけてカミといふも、彼方言に出しも知るべからず。○樹名(楷)によりてカミといふ名起りしも知るべ

からず。又紙といふものの始は、古の時竹簡に代へし所なりとも見わたれば、カミといふ名、簡の字の音の轉せしもまた知るべからず。(東雅)

○かも(氈) 倭名鈔に野王の説を引て毛席也、讀でカモといふと註せり。日本紀に氈讀でアリカモといふ。卽是百濟の方言と見わたる。……○氈氈をアリカモといふ事百濟の方言に出んには、氈をカモといふ事もまた知りぬべし。(東雅) ○から(韓、唐) からとは高麗カなり。略語なり。かうらいをからといふよりして、唐をもからと云なり。今つくしの俗高麗人を唐人と云ふに似たり。(日本釋名)

唐をからとよむは朝鮮あたりに加羅といふ國ありしなり。異國より日本國王に賜ひし都督軍事の官に任那加羅などと數へて云へり。初めて吾邦に通じたる故、異國人のことを後には皆からといへるなるべし。(南留別志)

韓國をからといふは大伽羅國也。漢唐などをからといふことは後世のことにして、日本紀には漢をあや、唐をもろこしとのみよみて、からとよめる例なし。萬葉集には唐土を韓國とよめる歌あり。又漢人をからひととよめり。されば奈良の朝よりは一にいひしにや。今朝鮮に加羅島あり。(倭訓栞)

外國をからといへるは、外國の人始て來るものは意富伽羅國なり。夫より外國をすべてからと稱す。意富伽羅は東國通鑑にいへる大駕洛國にして、新羅其國を滅ぼし、金官郡と號する所なりとぞ。(檀尻)

最近今西文學士は、加羅は『カラ』なり。日本書紀等には朝鮮半島の地理的稱呼として韓または三韓と書して之を『カラ』と訓ませたり。朝鮮人また半島の地理的稱呼に三韓または韓の文字を用ゆる事古より今に至るまで引き續けども、其訓方を失し、字音を以て之を呼べり。然りと雖、カラは上古朝鮮人の自稱にして、尙ほ古くは『カンナ』もしくは『カンナラ』と稱せしを、秦漢の人此『カン』の假字に、『韓』の字を用ひ、樂浪帶方の漢人之を鑿用し、日本及び朝鮮に傳へしもの如し。

日本にては朝鮮半島の南半即ち韓種族の住地を『カラ』と稱せしが、後代に至りては、此稱呼の地方の範圍擴まりて、朝鮮と地續きの支那をも含むに至り、次で半島に新羅高麗朝鮮等統一せる國家起るに及び、半島を呼ぶには此政治的稱呼を以てし、『カラ』の稱は主として支那に用ひらるゝに至れり。云々』と論じて居られる。

○からある(韓藍) カラア井とは、其葉の蓼に似たれば辛藍といひしにや。また韓藍ともしるしたるは此物もと韓地より出しにや。詳ならず。(東雅)

○からねび(主餘魚) 此國にして古の時にカラエビといひしは、昔三韓を呼びて

鯨城ともいひけり。此物もと彼方の海中に多くありて、其形詔陽魚に似たれば、カラエヒといひしと見わたり。カレヒといひしは、カラエヒといひし語の急に轉せしなり。(東雅)

○からかさ(傘) 傘をよめり。韓笠の義なるべし。手笠ともいへり。天正の比、堺の商人呂宋にわたり、文祿三年に歸りし時、太閤に獻せし是始也といへり。されど豊太閤の辭に、信長公よりからかさを許されて播州に發向せしとあれば、是より前既に有りし。但し許しなればさざるも亦今と異れり。(倭訓栞)

右の外倭訓栞に「からかみ」「韓紙」「からこと」「韓琴」「からころも」「韓衣」「からたま」「韓珠」「からはかり」「韓秤」「からろ」「韓臚」等と書き、「から」に韓の字を當てて居る。

○からさを(連枷) 韓地より傳へし所と見わけり。(東雅)

○からすき(犁) 此器もと韓地より傳りしかば、かく名づけしなるべし。(東雅)
新撰字鏡に鋏をよみ、倭名抄に犁をよめり。韓鋤の義也。牛にかけて耕す具也。

(倭訓栞)

○き 日本紀に鳥字よむでアサキといふは韓國の方言と見わたり。さらばキ

といふも、もとそ彼方言に出しも知るべからず。(東雅)

○きぬ(絹) 是等の事に據りて見れば絹をキヌといひしは韓地の方言に出で絹の字の音の轉じ訛れるやうにぞ聞ぬる。(東雅)

○くだ(竊竽管) 東國史の管ら城を日本紀に久陀牟羅としるさる。牟羅は韓語山也。クダも韓語にや出し。(東雅)

○くだかけ(雞) 百濟雞の略にて、もと百濟よりわたり來たりける故にやあらん。

(東雅)

東國には家をくだといふといへり。かけは雞をいふ也。一説に雞を梵に矩々陀翳設羅といふを略してくだといひ梵漢兼稱するにやといへり。一説に百濟雞の義、今の唐丸なるべしといへり。或は聲を賞して管掛といふ也。(倭訓栞)

伊勢物語「よもあけばきつにはめなむくだかけの、まだきになきてせなをやりつる」このくだかけは百濟雞の略にて、もと百濟よりわたり來たりける故にやあらん。かゝるたぐひ、高麗錦新羅斧など萬葉集中いと多し。(北邊隨筆)

(上略)又くだは東國にて家をくだといふの説はとるにもたらず。唐丸矮雞暹羅

南京にむかへて百濟鶏なりといふは、あまりにうがちたり。梵語矩羅俱吒といへるも、東國の片田舎の賤女には似げなき説なり。又夜くだちて鳴く故にくたけ鶏なりといへるは、さる事と聞ゆれど趣意違へり。憎みのしりいへるなれば、腐鶏とか頑狂くたけ鶏とかいふ義なるべし。(下略)(傍廂)

さてくたかけは腐鶏にてクタのタ清むベシ。その鶏をいたく惡み罵たる言にて……又據抄にくたかけの事を常ニ聞ク處ハ狐ニクヲハレテ、クツ庭鳥トイフ云々、又説本ニハクロカケト書タリ、烏鶏ナリト云々異説區々ナルベシ』といひ、また近き頃百濟鶏なりなどいへる説もしこほどとぎすなどいへると同趣なるいひざまなり云々。(比古婆衣)

○く。だ。ら。(百濟) 神功紀に百濟をよめり。舊多羅の義成べし。多羅は韓國の地名也。

(倭訓栞)

(金澤博士曰く、百濟又伯濟と書く。其の百又伯の音はビで、類(古音ビ)族たることを示す。濟の訓はヤラである。百濟又百殘と書す。殘の訓はこゝろである。』はしと相通する。古朝鮮語다라は山の義、야라は國の義である。クダラは다라又야라の約で、貊國又貊幽の義であらう。古代は山城を都とせるを考ふべしと。)

(最近今西文學士の説に、今の慶尙南道居昌は古く居陀といった。而して三國史記に依

れば、今の安東の地は新羅の古昌郡で、本と古陀耶郡である。古陀耶を古昌に改めたのから推すに、居昌と改めた居陀は居陀耶即ち居陀羅であらう。居は大の義あり。居陀羅は大多羅であらう。百濟を國語でクダラといふ。若し其の語にして百濟に接して百濟地方に入る門戸に當る地名から起つたとすれば、クダラは此居陀羅から起つたのであらうといはれて居る。

〇くち(鷹) 鷹を韓語にてくちといふ事仁德紀に見えたり。倭名抄に俱知、兩字急讀居といへり。百濟に鳩鶴トビといへる是なり。本草鷹の一名にも鷯鳩と見えたり。俊賴の歌にもよめり。今の朝鮮語にはまいといへりとぞ。(倭訓栞)

(神武紀の「宇陀の高城に鳴わな張る、わが待つや、鳴はさやらず、いすくはし、くちらさやる、云々」の「くちら」も鷯の義にあらずして、此の「くち」へ接尾語「ら」を添へたもので、矢張り鷹を意味するものであらうといふ説がある)

〇くつろ 眠藏みんざうクツロ 眠藏は塗籠也。下學集など古書に所見多かり。朝鮮にて

は今もクツロとて毎家にこれを營造し、主人の住所とせり。四方及天上をかべにぬりこめ、前後に口をあけ、出入にかゝみて中にいれば、立てもかしらつかへざるやうにかまへたるよし、對州の門人國分氏が物語也。(頭書)(太平記卅七ノニハ波ノ枕ニ鈍子ノ宿直) (松屋筆記)

○くまこま(熊) 朝鮮にテ 肆をこもかいとよむ。くまはこもの轉せるなり。(南留別志)

熊字讀てクマといふ事は、もとこれ百濟の方言に出しなト即ち今も朝鮮の俗熊をよびてクマといふは、猶方言の遺りたるなり。(東雅)

百濟の方言にも熊をばクマと云ひけり。今の如きも朝鮮の俗熊をよびてはコムといふ。クマの音の轉せし也。猶此にはウマといふ語轉じてコマといふが如くなりと見ねけり。○太古の俗神を畏れてカミといひ、又轉じてクマといひしは前に註せり。熊の如きも其猛なるを畏れてクマといひし。尙大蛇をイカツチといふが如くなりしと見ねけり。(東雅)

一説に日本紀に熊川をくまなれとよめるは韓語なるべければ、方言に出たる成べしともいへり。今朝鮮人くむといひけり。(倭訓栞)

(宮崎、白鳥、金澤諸博士も同源なりとして居る)

○くもこも(蜘蛛) 此物の舊名ササカニなどいふが如く、上世より云つぎし所やありぬらんを、後に韓地の方言によりてクモといふ事にはなりしなるべし。今の如

きも朝鮮の俗猶此物を呼びてクムといふ也。或はむかし三韓の服屬しまいらせし時、彼國の俗或國の語習ひし所の猶今も遺れるも知るべからず。(東雅)蜘蛛は喜母の轉せるなるべし。陸機が詩の疏に蠨蛸一名長脚、荊州河内人謂之喜母と見たり。今の朝鮮語もクモといへり。和蘭にスベムといへり。(倭訓栞)

(白鳥、金澤兩博士も同源なりとせられて居る。)

○くれ(吳) 吳をよめるは、かの國に至るに、高麗國の久禮波久禮志の二人をしるべとせし事、應神紀に見たり。よてかくはよそ也。吳人を置し所を吳原といふ。古事記日本紀に見ゆ。大和高市郡也。古歌に夜をこめて春は來にけり朝日山、くれはくれしのしるべなけれど。(倭訓栞)

(白鳥博士は朝鮮語(文)と同一語なりといひ、尙ほ三韓では早くから漢國を稱してきて居る。國と呼んだのを我が國にも、其の名稱傳はつて、吳なくれさいふのであるといはれる。)

●こきし(王) 垂仁紀に王をよめり。又こにきしとも見たり。昔外國の王を馴せり。杜氏通典に百濟王號於羅瑕、百姓呼健吉支、夏言並王也と見たり。(倭訓栞)

○こくろ。一説に白人をしらひとよみ、古久美の美を麗に改めて、新羅人高勾麗の義といへり。犯己母罪犯己子罪等の事、我朝には聞ぬを、こゝに來り住める

新羅人高麗人此事ありしをもて、冠らしめたりといへり。(倭訓栞)

(宮崎博士は朝鮮語(疣、贅)と關係あるといはれて居る。即ちコクミのコクは朝鮮語の事)に當り、ミは國語肉の意である。滿洲語にも富瑚一作蒲瑰といふ語があると論じて居る)

○こくり(高麗) 高の音をコクカクとし麗の音をリとす。コクリは倭訓にあらず。新羅、任那ニンナの音ミマもまた韓音也。因に云天ウマのかく山といふも、カクは高かうの韓音也。此類猶數ふるにいとまあらず。夫を考へずして韓の國語ぞ或は倭訓なりとおもへるは博ならず。(鹽尻)

高勾麗の音也。(倭訓栞)

●こたさし。日本紀に太子をよめり。百濟の語也。(倭訓栞)

●こにおる。日本紀に王后をよめり。太子をこにせしとよめり。私記に並に百濟の語也と見ゆ。(倭訓栞)

●こにきし(王) 王の字を讀てコニキシといひしは、百濟の方言也。彼國の書に新羅王むかしは居西干と稱し、後に居師コシ今と稱せしと見たり。其居師今はコニ

キシの轉せしなり。居師干はコニセシと云ひて、百濟にては其國の世子を稱したりけるなり。(東雅)

釋日本紀に出づ。コニセシム、コニキシとしるせし事覺束なし。ニシキモといふべきにや。其説長ければこゝに註せず。(東雅)

(白鳥博士は「コニキシはモミ即ち「大なる者」又「大なる人」の義であるといはれて居る。」)

●ここにせし。日本紀に太子をここにせしとよめり。私記に百濟の語也とみゆ。(ここに

の條
參照)(倭訓栞)

居師干はコニセシと云ひて、百濟にては其國の世子を稱したりけるなり。(ここに

の條
參照)(東雅)

○こほり(郡) 後に郡をコホリと云ひしは韓國の言に出でしなり。即今も朝鮮の俗郡をも縣をも並にコホルといふは、即コホリの轉語なり。或説にコホリとは小割なりといふ(日本釋名の説)。古語にかゝる義あるべしとも思はれず。(東雅)

「玉勝間」(本居宣中、御國の言と外ッ國の言と自ら似たるも同じきもある事)の條に郡の語を以て韓語と言つて居る。

新井氏は之を以て韓語なりと云へり。さもあるべし。(古事記傳)

新井氏曰、古保利益出于韓語、今朝鮮語郡縣云古保留、今按小治也、波與保通。(日本書紀通證)

天平中に諸國造郡之圖奉ると見ゆ。郡縣をよめるは拾遺集物名古本催馬樂にみゆ。小治の義なるべし。一説に朝鮮語にこほるといへば、もと韓語成べしといへり。韓地に熊備己富里ある事日本紀に見えたり。(倭訓栞)

(白鳥博士語はユキは今の朝鮮語郡州を指す。ユキは新羅國の健牟羅(コホンラ)(城の義)、百濟の固拔(コバル)(城の義)と同言なるか、或は高麗語の溝津(城の義)の遺つたものと見ることが出来る。白石が今の韓語に郡縣をコハルといふといつて居るのは、さもあるべき説であるといはれて居る)

(金澤博士はユキの義であるとし、ユは今日の朝鮮語ユに通じ「大」の義、ミは「村」の義である。蓋し郡を以て「大村」としたものであらうといはれて居る)

○こま(高麗) 高麗を訓するは狛ともいへば、駒より轉じたるにや。彼國の方言成べしともいへり。狛は狼に似て羊を驅の獸なり。唐には渤海郡とす。(倭訓栞)

○こま(獨樂) 古末といふは、もと高麗より渡りしものにや。(嬉遊笑覽)

獨樂をいふも高麗より出たるか。日本紀に高麗の軍兵歌舞興樂といふ樂。こ
まど訓せり。倭名抄にはこまくりと訓せり。宇治拾遺にはこまつふりと見わ
り。唐こまは借千々也といへり。(倭訓栞)

○こまいぬ(狛犬) 狛犬と書り。其始め高麗より渡しける獅子像也。(倭訓栞)

神社こま犬高麗犬と書べしと是なり。按するに高麗樂狛犬といふ曲ありけれ
ば、こま犬の名は韓のことなり。(鹽尻)

○こまつぶり(獨樂) 倭名類聚抄天文本一卷術藝部第五雜藝具廿六に獨樂辨色
立成云都无求里此間云古萬豆久利有孔者也。按に古くは都无求里といひ後に
古萬豆久利といへるよし也。都无は都夫の通音にて圓也。求里は久留の通音に
てクル／＼廻るゆゑの名なるべし。則圓轉の義也。さて都无久里を省て都无里
とも通はして都夫里ともいふべし。後に高麗より渡れるを高麗都夫里とはい
へりとも見ゆ。こゝに古萬豆久利とある久もじは、不の寫誤なる事論をまたす。

(松屋筆記)

○こまがい 茶碗の名にいふ。熊川をよめり。朝鮮の熊川郡也。朝鮮語に熊をくむ

といひ、川をかいといへり。日本紀にくまなれと訓せり。なれも川の韓語也。(倭

訓栞)

○こり 又此類(簾)にしてコリといふものあるは、韓地の方言に出でけり。今も朝鮮の俗コリともいひて、栲栳の字を用ゆるもの即是也。(東雅)

○さう(蓋) さうは蓋なり。朝鮮語なるべし。(南留別志)

○さうか(唱歌) 源氏に見ゆ。唱歌也といへり。今しやうがとよべり。體源抄に唱歌の詞は百濟國の語也。たりちりの類是也と見たり。(倭訓栞)

●さし(城) 城又讀てサシといひしは百濟の方言なり。(東雅)

雄略紀に城をよめるは韓語也。(倭訓栞)

○さふら(鈔鑼) サフラとはもと之れ新羅方言也。即鈔鑼也。雜羅の義にはあらず。即今も朝鮮より此器を出せり。俗にサハリといふはサフラの音の轉じたる也。

(東雅)

倭名抄に鈔鑼二音與沙羅同俗云沙布羅と見たり。今の世にサハリといふ器はサフラの轉訛なるべしといへり。(倭訓栞)

(音海に字の音の訛。佛經に多く沙羅に作る。胡語なりと云。新羅金椀)の
新を羅と誤り、雜羅(さふら)なりと云ふは非なりといはれて居る)

○さ。ら(皿)「東雅に和名抄に唐韻を引て鈔羅銅器なり。鈔羅音與沙羅同、俗云沙布羅、今按或說言新羅金椀、出敷羅國、後人謂之雜羅者新之訛也、正說未詳と註せり。さふらとはもとこれ新羅の方言なり。即沙羅なり。雜羅の義にはあらず。即今も朝鮮より此器を出せり。俗にサハリと云ふは、さふらの音の轉じたるなりといへり。(和訓栞)に……今俗はちさらと並べ稱するは梵語の鉢沙羅より云へるなるべしとあり。(和名抄)に壺を佐良介とあり。(日本紀)に淺甕と書たる是なり。然らば淺らけの名を上下略してさらとは云へるならん。鈔羅と同音なるによりてさらはしき也。(嬉遊笑覽)

(高楠博士は之を梵語なりとし、沙羅婆は皿と譯す。眞儀軌中に用ひられ、遂に一般の用語となる。古代は多く木の葉を用ふ。宮中にも此の式存すといへり。印度山地にては今尙多く沙羅婆の葉を用ひるさいはれて居る)

○し。き(城)城をしきとよめるも欽明紀に見えたり。韓語にや。(倭訓栞)

○し。ま(島)(上略)又彼國(朝鮮)にて島をよびてセマといひしは、即之れ我國の方に倣ひしなり。即今も朝鮮の俗島を呼びてセムといふは古の遺言也。(東雅)

(白鳥、金澤兩博士も之と同一論である)

○しらぎ(新羅) 字音を用ひたるなるべし。(古事記傳)

今按新羅或作斯羅久尔反爲岐也。(日本書紀通證)

新羅をいふ。しらは斯羅也。きはくに反きなれば國の義也といへり。(倭訓栞)
新羅國をしらぎのくにとよむはあしきにや。國をきといふ切キニの只三字をし
らぎと讀べき也と或人いへり。(鹽尻)

○すき(村) 村又讀てスキといひ、スクといふが如きは、百濟の方言也。(東雅)

日本紀に村をよめり。韓語なり。すぎりとも見ゆ。(倭訓栞)

○すくり(村主) 又古時人名姓字等に村主の字見えて、讀てスクリといふが如き
も、又百濟の方言也。凡姓字に村主と稱せしは、皆是大漢三韓等の譌蕃也。それが
中に漢人の如きも、其祖先三韓の地に流寓し、彼土の村主などいふものになり
しが、我國に歸化せしに、かへりて姓となりし所なりと見たり。(東雅)
日本紀に村主をよめり。韓語に村をすぎとよめり。ぐり反ぎなれば同語なり。

(倭訓栞)

(宮崎法學博士は朝鮮語 Sakuri に當り、Saku は城の字音、モリは mor (首長たる人) の同一語であらうといはれて居る)

(中田法學博士は朝鮮語 Syuk-i-omun に當り、Syuki は Seu-i-kol と同一で、郷又は還郷の意 seu-i は周書に於陸(王妃)の義書紀に「オィタ」と見ゆる Oi と同一で、主長の意なるべしといはれて居る)

○すず(鈴) 鈴讀てスズといふ義詳ならず。これも亦韓國の方言に出し所なりしに似たり。○鈴をスズといふ事其說特に長し。其說の如きは我別に記せしものに詳なれば茲には記すに及ばず。(東雅)

○すみ(墨) 炭をスミといふに依れりしも知るべからず。我國にして紙墨造る事は、高麗の法を傳へしと見わたれば、其名の如きも又彼國の方言にや出でぬらん。瑜麋とは漢代の墨の名なりと見たり。云々。(東雅)

○せう(兄鷹) 我師なりし人の、兄鷹をセウといふは百濟の方言なりと教へ給ひき。此人うきたる事いふ人にはおはさず、必見し所こそおはしたらめ。審に問ひまいらせざりしは、我怠にこそありつれ。(東雅)

●せしむ(王子) 日本紀に王子をよめり。韓語也。(倭訓栞)

○せま(島) 日本紀に島をよめり。韓語なるべし。今の朝鮮語にせむといふとぞ。

(倭訓栞)

○たか(鷹) 或説にタカは高也。其高飛をいふといへり。もしさらば義は自ら明かなれど、鳥の高く飛ぶ此物にしも限るべからず。この勢は猛なるをもてタカといふ。タカはタケの轉語なりしに似たり。すべて鷹の名を呼びし名、韓地の方言に出しと聞ゆるもあれば、強て其説つくるべからず。(東雅)

○たたら(踏鞴) 踏鞴讀でタタラといふは、新羅の方言に出しと見わたり。(東雅)

○たたり(絡梁) タタリといふは百濟の方言と見わけり。これも絡絲^{まじり}之具也。

(東雅)

○たひ(鯛) また後にタヒと呼びし事は、三韓の方言によりしと見わたり。即今も朝鮮の俗此魚を呼びてトミといひ、道味魚の字を用ゆ。其トミといふは、彼國のいにしへタヒと云ひし語の轉せしなり。(東雅)

○ちよく(猪口) ちよくは鍾なり。朝鮮語なるべし。(南留別志)

また鍾の字讀でサカヅキといふ也。即今瓷器にしてチヨクといふものは是也。鍾をよびてチヨクといふは、福建及朝鮮の方言なるを、近俗かの方言の如くに呼

びしなり。(東雅)

常に猪口と書く。或説に盞を鍾といふ。ちよんつうは鍾子也。今瓷器にいふものは也。鍾を猪口といふは、即今福建及朝鮮の方言也とぞ。佛經に鍾をしゆくといふ。さればしゆく音轉じてちよくとなれるなるべしといへり。黃鍾をわうしきとよみ、萬葉集にしぐれを鍾禮と書けるも皆古音なり。(倭訓栞)

○つ(州) 州をつとよむは神功紀天智紀に見えたり。三韓の音なるべし。(倭訓栞)
○てら(寺) テラと云ひし義の如き不詳。或はこれ當初百濟高麗等の方言にや出たりけん。其事又不詳。(東雅)

丹青色をまじへて其光のてらす故に名付るか。又法の燈をこゝにかゝげて冥き途をてらす故ともいふべし。△眞淵云新羅百濟などのことばにはあらぬか。此二つの説にはあらじ。(圓珠庵雜記)

又今の朝鮮の言と同じきは、寺郡てこほなどのたぐひは、まことに韓語をとれるなり。云々。(玉かつま)

寺をよめり。日本紀に精舍伽藍をもよめり。莊嚴のてりかゝやく意にや。今の朝

鮮語にてるといへば、もと韓語にや。(倭訓栞)

(上略)百濟にててらといふを訛りて、我國にてはてらと訓めりといふ。俚言集覽
増補)

(金澤博士は利の字の朝鮮
音といはれて居る)

○どくねぎ(東萊) 東萊の韓語也。日本に近き朝鮮の縣にて、うる山釜山かいも此
縣に在也。云々。(倭訓栞)

○どど(魚) 饅頭屋節用集に云、和國兒女呼魚曰斗斗、類說云南朝人呼食爲頭、呼魚
爲斗也。見ゆ。かゝれば、魚類をどといふはふるき詞なり。泉の堺の魚屋に斗
々屋といふ家號あるも、此ゆゑならん。右節用集は林逸の作なり。辨疑書目錄植
字書目の部に節用集眞書本二冊文龜本とあり。其後慶長二年の印本あり。ふる
きを知るべし。倭訓栞といふ兒女の語に魚をいふは、芝峰類說に南朝呼魚爲斗々
と見ねたり。韃靼語なりといへりと見ねたり。(骨董集)

○どんび(貂皮) 今俗に貂皮をトンビといふは貂皮の音を轉せしにて、朝鮮の方
言に依れりと見ねたり。(東雅)

○どろ(虎) 虎をよめり。曆注に武をよむといへり。人をとるの義也。一説に楚人虎を於菟といふ。於是發聲なれば、倭人も同音にいひしにや。らは多くそへていふ辭也といへり。或は高麗語也ともいへり。(倭訓栞)

○どら 今昔物語に度羅鳥の事を載て、人の中につたなくして人に似ず、みだりに物を食ふ者をば度羅人といふ也と見たり。續日本紀に度羅樂あり。度羅は耽羅と同じきにや。今は朝鮮に屬し、濟州といへり。延喜式に肥後の耽羅嶺、令義解に耽羅脯見ゆ。(倭訓栞)

○どろ(鳥) 即今朝鮮の方言に鳥讀でチョといふが如きも、トといふ聲の轉せしに似たれど、是等は彼國の方言にもあらず。其字を讀むの音なれば、此語のかしこに傳はる所とも聞かず。(東雅)

(百鳥、金澤兩博士は朝鮮語計鳥)
(と同源であるといはれて居る)

○どろ(取) 鷄林類事に方言凡呼取物皆曰都羅と見たり。筆をとるは右筆燭をとるは秉燭、薪をとるは采薪をとるは採薪をとるは採、鈴をとるは把、弓をとるは手、刀をとるは握、柯をとるは執也。靈異記に擒もよめり。又取娶と同じ。(倭訓栞)

○ながれ(流) 川また讀てカレと云ひしは百濟の方言也。我國の語に川流をナガレと云ふ事も、彼國の方言に因れるなるべし。即ち今も朝鮮の方言に川を呼びてカイといふ也。(東雅)

○なれ川 川をなれといふは古の韓語也。今朝鮮人かいといふとぞ。(倭訓栞)

○にしき(錦) 日本紀私記には錦の字古訓ニシキといふと見たり。もとこれ彼國の方言に出し所なるに似たり。(東雅)

○にりむ(王) 余利牟ハ韓語也。(日本書紀通證)

日本紀に主をよめり。韓語也。(倭訓栞)

○ぬて(鐸) 鐸亦讀でヌテといふは百濟の方言に出し所と見たり。(東雅)

奴豆は奴理豆の理を省ける名也。或人奴豆は百濟言なりと云り。然らばもと奴理豆も然るにや。なほよく考ふべし。云々。(古事記傳)

○はしかし(夫人) 波之可之蓋韓語也。崇峻紀欽明紀訓於利久亦同。(日本書紀通證)

日本紀に大夫人をよめるは百濟の語也。(倭訓栞)

○はた秦 秦姓をハタと云ひし義は、姓氏錄古語拾遺に見えし所の如くなるべしとも思はれず。其說特に長ければ、こゝには注せず。ハタは韓國の語なり。東雅

○ばつち

袴襦の類にいふ。朝鮮語也といへり。或は褌袴を譯す。(倭訓栞)

今俗間士商共に着するバツチと云へるも、ひきに似たる一種あり。其名何なるか故を知らず。或日林子の語れるは、我が方に對州の士來れるものあり。官事の次で彼邦の談に及ぶ。然るに鮮人の着するも、ひきの如きものをバツチと謂ふ。彼國の名なりとさればバツチはもと鮮國の服にして、彼國の名且彼より傳はれるなり。人皆その由を知らず。(甲子夜話續篇)

○はんす 人參にいふは朝鮮三使の判事の持來りしを賞せしよりの名なり。○

渡來の茶盃にも此名あり。(倭訓栞)

○ふうす 副使をよめり。朝鮮正使の佐なり。(倭訓栞)

○ふくる腹 俗にふくるといふは、もとこれ韓地の方言に出づ。即ち是れ豐の字

の韓音と見えたり。即今も方言之に似たり。豐腹をハラフクルなどいふ如きも此義也。(東雅)

○へすおと 日本紀に倉下をよめり。韓語なるべし。(倭訓栞)

○ほうらん 朝鮮石解と呼ものをもいへり。(倭訓栞)

○ほさつ(米) 民間の語に穀モミを呼びて菩薩といふ事あり。此語はもと韓地方言に出しなり。鷄林類事にかの方言白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふとしるせり。(東雅)

俗に菜穀を菩薩といへり。遠江天龍川の上にては専ら稱す。鷄林類事に白米曰漢菩薩、粟曰田菩薩と見ねたり。白を漢といふもとより韓國の方言なりといへり。(倭訓栞)

遠江方言米を菩薩と號するは、何の帝の勅許にや、更におぼつかなし。鷄林類事白米曰漢菩薩、粟曰田菩薩云々。(柳菴隨筆)

(金澤博士は朝鮮語米を *Psar* といいふは *po-sar*)
(菩薩の省略であらうといはれて居る)

○ほだい(海) 日本紀の釋訓に海をよめり。今も朝鮮の東南の俗海を呼てほだいいふなりといへり。(倭訓栞)

○ほとけ(佛) 眞淵云、木のはじめはけなれど、人を貴みて云にさと云ひ來れり。ほ

どけは浮屠とさもあるべけれど、けは猶あるべし。又是も百濟の語か。かしこより渡せし時は、いかか云ひてわたしけん。こゝに付けたる名とも聞えず。(圓珠庵雜記)

我國の語に是を名づけてホトケといひしは百濟の方言によりし所也。ホトケとは即ちこれ浮屠といふ語に寄せて轉じ訛りし稱とこそ見わたれ。(東雅)

○ほろし程　ホロシと云ひしは韓國の方言にや出でぬらん。(東雅)

○みしはせ(肅愼)　欽明紀に肅愼をよめり。後漢に挹婁といひ、唐に靺鞨といひ、宋に女眞といひ、元明に女直といふ、皆一也。西土朝鮮の東北にあたり、其末蝦夷の地に接すといへり。坪碑に去靺鞨國界三千里と見ゆ。(倭訓栞)

○みそ(味噌)　漢語抄辨色立成等の如き並に高麗醬を呼びてミソと云ひしは、即是高麗の方言に依れる也。鷄林類事によるに漿曰密祖と見わたる。……○はしめ彼國の制に倣ひ造れる所なれば、其名をも彼方言のまゝに呼びける也。云々。

(東雅)

味噌の儀も諸説御座候へども、鷄林類事などにて見申候へば、三韓方言に御座

候、云々。(白石先生手簡)

新井氏の説の如く韓語ならんか。(玉勝間)

味噌は和語にて「ウマシホ」の義なり。鶏林類事に「醬曰密祖」と見え、和名抄に高麗美蘇とあるを論じて、通雅に朝鮮の俗醬を呼事を我國の如くなりと云也。末醬の字は本朝令にも記されし所なれば、即是我國の方語也。又俗に「ムシ」といふも「ミソ」と云語の轉せしなりといへり。云々。(松屋筆記)

(言海に、朝鮮語に醬を密祖といふ。和名抄に高麗醬の稱あり。證とすべし。同書に末醬を未醬と誤れりとの説、或は唐僧鑑真嘗て未嘗有と稱したるに起るなどいふ、皆附會なりといはれて居る。)

○みまな(任那) 新羅の西南にある國也。御間城天皇の御名によりたる事日本紀に見えたり。みまなもみまきも任那も相通せり。(倭訓栞)

任字は「シン」又「ニン」音なるを「ニン」の「ニ」と「ミ」と通ふ音なれば、其かみ彼國の訛音に「ミン」と唱へならひたるまま「ミマ」といふに叶へて任那と書き連ねたるものなるべし。なはいはば昔より壬生を「ミブ」と「ニブ」と二様に唱へ來れるも、もと壬字を「ニン」とも「ミン」とも唱へたることなるべきこと、はた思ひ合すべし。(中外

經緯傳

(宮崎法學博士は朝鮮語 maknana であるとし、mi は國語「御」、ma は朝鮮語 ma-ta (任す) の意に當り、ma に朝鮮語「國」の義であるといはれて居る)

(最近今西文學士は、思ふに古代朝鮮に於て「ミ音」ミ音とは相轉せしなるべし、顯著なる一例を舉ぐれば、日本書紀神功紀に新羅王波沙寢錦あり、新羅の末に崔知達が撰みし智證大師塔碑に通願居寢錦之尊の語あり、寢錦が新羅の王號尼師今を別字を以て表はせしものなることは明白なり、寢字の朝鮮現代音は^ニミ^ンにして、新撰字鏡にも寢已至反とあり、寢錦のミキンなること知るべし。音紀にムキンを讀ませしは音便なり、尼師今「ニシキン」のシ音略せられて「ニキン」となり、轉じて「ミキン」となりしか、或は「ミキン」より「ニシキン」に轉ぜしかなるべし。「ニシナ」「ミシナ」となり、「ミヤナ」となるに怪むに足らず。云々と論ぜられて居る)

「任那」の名は從來多く日本の書籍にのみ存して居るやうに考へられて居るが、朝鮮側に於ても「昌原にある新羅景明王撰眞鏡大師塔碑」(二)滿洲輯安縣にある廣開土王碑、(三)三國史記強首列傳等に於て發見することが出来る。

○^ミ^ク^リ^コ^ク^リ 後宇多院弘安四年もろこしより日本をせめしが其時もろこ

しの王は蒙古國の人にて中華をきりどられし故、其兵を蒙古といふ。もうことひくと通音なり。りの字は下のこくりに對したる助字なり。又其折ふし高句麗

の王もろこしに出仕せられしが、日本へ兵をつかはされば蒙古に加勢せよとて兵船を日本へわたせり。高勾麗は高麗の本名なり。かうこうらいとよむべきを、通音なればこくろと云ふ。此事康富記ヤストミに出たり。蒙古より日本をせめし時高麗コリヤも加勢せし事は元史及續通鑑元文類等の書に見えたり。云々。(日本釋名「麗耳」に……蒙古國裏と云ことの云ひ誤也。筠庭云、此説わろし。蒙古高勾麗コリヤの二賊をいふなり。云々) (嬉遊笑覽)

蒙古高勾麗の轉訛せる也。(倭訓栞)

○むら(村) 日本紀に城の事を牟羅と書せしは、三韓の語也。(倭訓栞)

(宮崎、金澤、白鳥の諸博士は何れも朝鮮語)
(可魯と同源であるといはれて居る)

○むれ(山) 山の字讀てムレといひし如きは百濟の方言也と見えたり。云々。

(東雅)

无例蓋韓語、八雲御鈔云、牟禮山名、今朝鮮語云毛惠モエ。(日本書紀通證)

日本紀に山をよめり。韓語也。今はもゑといふとぞ。齊明紀のむれかうへを私記に小山之上也と見ゆ。(倭訓栞)

○もろ^〇縦^〇 妄^ヒ樞^ミは朝鮮のこゑなり。(日本釋名)

倭名抄に縦をよめり。新撰字鏡にもむの木と訓せり。一説に妄樞と書り。朝鮮の音といへり。云々。(倭訓栞)

○ゆ^〇す^〇ら^〇櫻桃^〇 ユスラといふはもと韓地の方言に出しなり。即ち朝鮮の俗に移徙樂としるせしは、ユスラといふものは是也。(東雅)

○ゆ^〇り^〇百^〇合^〇 ユリミ云ひし事は日本紀に見えし所に據るに、高麗百濟等の地方の呼びし所と見えたり。(東雅)

○よろ^〇ひ^〇鎧^〇 鎧の字讀てヨロヒといふは、百濟の方言に出しに似てけり。……○又ヨロヒといふ事も、元これ我國の語に出たらんにはヨソヒと云ふ語の轉せしなるべし。(東雅)

○わた^〇海^〇 海をワタと云ふは韓地の方言と見えけり。日本紀に海をホタイといふは百濟の方言なり。今も朝鮮の俗バタイといふなり。并にこれワタの轉語なり。(東雅)

太古の時より云つぐ海を呼てはアマといひしを、また韓地の方言によりてワ

々とも云ひけり。日本紀の釋訓に海を讀てホタイといふ事の見えし即是也。猶今も朝鮮東南の俗海を呼てハタイといふ也。今によりて古を推すに、日本紀釋訓にホタイと見えしは或はボタイ或は又バタイの字訛てホタイとなりしも知るべからず。ボといふ音の如きは此國になき所なりければ、其音轉じてワタとならざる事を得ず。是れ皆其音を轉じて呼びしにはあらねど、其音の自ら轉じたりける也。東雅

○を魚 ヲといふは韓地の方言也。今も朝鮮の方音魚讀てヲといふ也。(東雅)

○をさ(譯語) 乎佐本韓國方言、欽明紀所謂曰佐是也、一說漢語鈔箴乎佐、蓋取往來通事之意而名之。(日本書紀通證)

通事譯語などをよむは、もと韓語と見えたり。日本紀に百濟の人名に曰佐分屋といふあり、姓氏錄蕃別に上曰佐下曰佐調曰佐等の姓あり。又修辭チヤハヒの義にや。云々。(倭訓栞)

○をらんかい(元良哈) 女眞國也。朝鮮征伐の時、加藤清正此土の人とも戰へり。

(倭訓栞)

或時對州の芳洲雨森氏に是を問ふ。雨森氏云朝鮮の方言に總じて邊界荒外の地を呼びておらんかいといふ事、定りたる一所の地名にあらず。胡の字を書きて朝鮮にておらんかいと讀む。此方にてゑびすと讀むが如し。清正の過りし處は何れか知らず。朝鮮西北の塞外なるべし。女直兀良哈にはあらじ。朝鮮人に此所は何といふ地ぞと問ひし時に、おらんかいと申ししにぞ。女直兀良哈をおらんかいと讀むも、朝鮮の國語を傳へ聞きて誤れるなりと。これにて余が嘗て疑ひしも始めて釋然たり。(善庵隨筆)